スポーツと女性

宮嶋泰子

皆さんこんにちは。皆さんは一期一会という言葉をご存じですか。どんな漢字を書きますか。一期一会というのは、この人と今会っているけれどもいつまた会えるか分からない、これが最初で最後かもしれないと思って人に接していくことなのです。私は今日皆さんの前でこうして話していますけれども、今度いつ皆さんにお会い出来るか分からないので、そういう意味でとてもいい出会いだと思っています。

実は、今漢字のことを聞いたのは、三日前にテレビ朝日で女子アナの入社試験があったのです。私は面接官をしたのですけれども、「皆さんをこれからインタビューアーとします、そして今ここにいる男性の人に仕事の醍醐味についてちょっと話を聞いて下さい」と言ったのです。そうしたらみんなが「今朝は何時に起きられましたか、食事は何をとられましたか」、そうやって入っていくのです。何なのだろうなと思って、「もう結構です」とインタビューアーの方から答えが返ってくるので、「ねぇ、それで仕事の醍醐味って聞けたの」と言ったら、「はぁ」、「ねぇねぇ、あなた醍醐味ってどういうこと」。みんな仕事の醍醐味の「醍醐味」という言葉を知らないの。知っていますか。醍醐味というのは、とても大切なもの、そのおもしろさ、最高のものということなのです。実は、語源はキャラバンで行く途中に、皮の袋に入れた牛乳が発酵してすごくおいしくなってしまったの、そのヨーグルトのことを醍醐と呼ぶのです。

日本語というのは、時と一緒にどんどん忘れられていったりとか、意味が分からなくなっていったりするものだと思うのですが、私達の年代で「醍醐味」と言って分からない人というのはほとんどいないのです。言葉というのは変わっていくのだけれども、チャンスがあるごとにみんな言葉をブラッシュアップしていって欲しいと思うのです。

何でこんな話をしたかというと、ちょっと私は入社試験にショックだったのです。恐らくみんなこういう小さい辞書を最近は持っているのだと思うのです。引く辞書ではなくて電子辞書というのかな、

あれは和英も使えるし、英和も使えるし、それから広辞苑も入っているよね。ああいうものをまめに引くことによって、どんどん知識というのをストックしていって欲しいよね。昔は本を読んで知識が得られたけれども、みんながもう携帯電話に忙しいし、ゲームに忙しいし、テレビに忙しいし、本なんて読まないでしょ。どんどん言葉を失っていって、言葉というのは何かというと、自分を表現したり、自分が何を考えているのかというのを系統だって整理していくためにとても必要なものなの。で、言葉を失うということは、自分が考えていく方向性を失っていくということなのです。だから、みんなには是非言葉を大切にしていって欲しいと思います。

何故私がこんなことを若い女性の前で言うかというと、恐らく大学で勉強していることも、私がこれから話すこともそうなのだけれども、いろいろな仕事を社会に出てしますよね、そういう時にも何のために仕事をするのか。それはもちろんお金を稼ぐため、生活をするために仕事をするのだと思うけれど、それ以上にその仕事を通じて、それから生活を通じて、少しずつ自分も豊かになっていって欲しい、肥えていって欲しい。成長とか肥えるという言葉が好きでなかったら、もっと深くなっていって欲しいという言葉の方がいいかもしれない。心の襞を沢山作っていって、感性を豊かにしていって、いろいろな人に豊かな気持ちで接することが出来るような人になっていくために、やはり私達は仕事をし、生きて、そして自分というものを見つめながら一生を終えていくのだと思うのです。

で、今まで学校で勉強してきたことも、これから社会に出て学んでいくことも全部そうだけど、私達はなんで歴史を学ぶのだろうか。歴史は年号を覚えるために学ぶのではないよ。歴史なんて大嫌いだという人一杯いるでしょ。何で歴史を勉強してきたの。今みんなが生活しているこの時代、今自分達が立っているところがどういうポイントなのか、どういう歴史を経て自分というものが今いるのかということを知るために歴史があるのだよね。そして未来はこれからどういう方向に進んでいくのかというのを見るために歴史を勉強しているの。

それから世界のことを学ぶというのもどうしてだろうか。それはやはり自分が今地球の中のこのポイント、ここに住んでいる、自分とは違う物の見方の人達が沢山世界に居るよね。じゃ、この自分の考え方はどうなのだろうか、そういうことをしっかり確立するために世界のことを学ぶの。国が違ったり、物の見方が違ったり、宗教的な考え方が違ったりすると、全く違う方向の考え方も生まれてくるということを、まず私達は知らなければいけない。そしてそういう考え方があるということを理解して見なければいけない。

私が今言ったことは、自分のポイントというものを探すためには、まず歴史を見て、それから地球の今あること、世界のことを見る。こういう軸の中から、自分が今いることをいろいろ考えていって欲しいということなのです。

私は、急にこんな話をしてしまったのですが、実は何の仕事をしているかということをちょっと自己紹介しなければいけないと思っています。

入社したのが一九七七年で、アナウンサーとしてテレビ朝日に入社しました。その後すぐテレビ朝日はモスクワオリンピックの独占中継というのがあったので、女性のアナウンサーを誰かスポーツ担当にしなければいけないということで、私が担当になりました。

ちょうどその頃、一九七九年に東京国際女子マラソンというのがあって、この中継に第一回から私は関わらせていただくことになったのです。

それから八〇年ぐらいから、当時はまだニュースステーションはありませんでしたので、スポーツニュースのキャスターをしました。今ではスポーツニュースを担当しているのはほとんど女性だけれども、その当時は女の子がスポーツを読むなどというのはなくて、当時初めての女性スポーツキャスターなどと言われたのですけれども、今では当たり前の「江川卓が」などという呼び捨ても、何で女が男の選手の名前を呼び捨てにするのだと言われた時代がありました。笑っちゃうよね。

それから八三年ぐらいになると、インタビューを編集して切ったりとか、映像を取材してきたものをつなげたりというような、番組作りをするようになりました。ニュースステーションが出来てからはずっとニュースステーションの番組を作ったりとかしているわけですけれども、後は実況もやるものですから、一応いろいろな種目をやってきました。ですから、オリンピックにはモスクワからシドニーまで夏と冬の大会を通じて十回行ったことになります。回数だけはやたら行っているのですけれども、そのほかには、ニュースステーションで言うと橋本聖子さんの特集を作ったりしました。

それからスポーツというのは沢山いろいろなスポーツがあるわけですけれども、私は一九九〇年ぐらいから障害者のスポーツをかなり取材するようになったのです。これは何故かというと、さっき言った歴史のことに戻るのですが、本来スポーツというのは力強くて、パワフルで、ある部分暴力的で、そういう要素を沢山含んでいます。いわゆる男らしいと言われる部分のものがスポーツにはあるわけです。そうすると、女性がスポーツをするということは、「何で女の子なのに、可愛く綺麗にしていればいいのに、こんな辛いことするのだろうねぇ」、そこから始まるわけです。そういう時代が、女の子がスポーツをしても普通に見られるような時代に変わってきて、今度は障害を持った人達がスポーツをする。

女性だろうが、障害を持っていようが、体を動かす楽しさというのはみんなが感じることなのだから、それは当たり前のことなのです。要するに、初め誰かが当たり前と思っていたことを、次に「やっちゃだめよ」と言われた人達が挑戦していく、そのプロセスをたまたま私はスポーツを通じて見てきたわけです。

先ほど司会の方が女性学を勉強していらっしゃるということがありました。この大学では恐らくジェンダーというものを勉強していらっしゃるのだと思いますけれども、皆さんジェンダーというのは何ですか。女性学で多分やっていると思うけれども、ジェンダーという言葉を聞いたことがある人。ちょこちょこっとあるね。じゃ、セックスという言葉を聞いたことがある人。これはみんな知っているよね。セックスとジェンダーの違いが何かと明確に言える人はいますか。生物学的な性のあり方をセックスというのです。だから、私のセックスは女性です。彼のセックスは男性です。そういう生物学的なことをセックスというのです。で、文化的、心理的、社会的な性のあり方をジェンダーと言います。ですから、女性としての役割であるとか、本当にそれが女性の役割かどうか分からないけれども、「これは女の仕事だよ」、それから「そんなこと女がやっちゃいけないよ」、こういう時の女というものをジェンダーと言います。

で、文化や社会それから歴史の中で、ジェンダーというのは非常に異なった変化、形を見せてくるわけです。

さて、本題のスポーツに戻りますけれども、オリンピックは古代オリンピアに元をとっていると言われています。オリンピックというのは一八九六年にクーベルタンがアテネで最初に始めたものなのですけれども、実はそれは古代ギリシャで行われていた大会を模して行われたと言われています。その時には、女は入れたでしょうか。古代オリンピアで行われていた競技会に女性は全く入ることが出来なかったのです。というのは、男の人が裸で競技をしていたから。それで、女の人は見ることも出来なかったのだけれども、ある時息子の雄姿を見たくて、あるお母さんが男性に変装して見に行ったという、そういう記述が残っています。

それを真似た近代オリンピックですから、一八九六年にクーベルタンが「さあ、オリンピックをしましょう」と言ったって、女性のことなんて全然考えてくれないよね。女性についてクーベルタンは何と言ったと思いますか。「女性の役割は勝者に冠を与えるのが仕事である」と言ったのです。要するに、競技をするのは女性の役割ではない、これがクーベルタンの考え方です。

で、初めて女性がトラックを走ったのは一九二八年のアムステルダム大会です。このアムステルダム大会というのは、日本の織田幹雄さんが三段跳びで優勝し、それから日本人の人見絹枝さんという、この人は毎日新聞の記者だった人ですけれども、この人が八〇〇mを走って銀メダルを取ったということです。この人見絹枝さんというのは岡山出身なのだけれども、みんなは有森裕子さんを知っていますよね、彼女も岡山出身で、有森さんは「人見さん以来の陸上競技の銀メダリストです」と、一九九二年のバルセロナのマラソンで銀メダルを取った時に言われました。その人見絹枝さんというのが一九二八年だったのですが、この時にとにかくこの八〇〇mが終わったら、みんな女子選手達が倒れ込んでしまったのです。結構八〇〇というのはきついですよね。競技場四〇〇mのトラックを二周でしょ、あれを全速力で走ったらものすごく辛いと思いませんか。で、倒れてしまったので、女には走るのは無理だということで、それ以後国際陸上競技連盟の反フェミニスト達は、二〇〇mを超えるすべてのレースに女性を出すことを禁止する措置を取ったのです。

ここにすごくおもしろい記事があるのですけれども、これは当時の新聞なのです。オリンピックではなくてオリノピックと書いてあります。ここに書いてある記事がとてもおもしろくて、「女選手初出場で騒ぐ野次馬」と書いてあるのです。その記事を読むと、「トラックに女子選手が現れたが、西洋のこととて女子なるが故に野次馬達は大喜び、スタンドから見ると一人残らず断髪で、おまけに男子と同じ服装であるが、さすが柔らかい体つきで、走り方ののろいところはやはり女の子だと思わせられる」というような、こういう記事が新聞に載っています。非常に笑ってしまうのですが。

いずれにしても、こういうように女の人が走る、それも足をむき出しにして走るなどということを、非常に快く思わなかった人達がいるわけです。

で、この後、女性達はどうするかというと、オリンピックでそんなに自由に走らせてもらえないならば、自分たちだけで女子オリンピックを作ろうということを決めまして、女子オリンピックというものに参加していく選手達が現れます。でもおもしろいのは、一九

二〇年代というのは、ちょうど世界的に女性の参政権運動が盛り上がった時期なのです。これと同時に、機を一にしてスポーツで女性が活躍し始めるというのは、これは偶然ではないなぁという気がするのです。

それからマラソンなども、あんな長いものは決して女性が走れるものではないと言われていたわけですけれども、一九六七年ですから、東京オリンピックの三年後、ボストンマラソンをどうしても走りたいという女の子が、男の子、ボーイフレンドに両脇を固められて、ヤッケのフードを被ってボストンマラソンを走ったのです。たまたまテレビ朝日にその映像があったのですけれども、役員がゴール直前で「あっ、あいつは女だ」というのを見つけて、その人のゼッケンをむしり取ろうとしてすごい勢いで追いかけているのです。要するに、女は走ってはいけないというふうに思われていて、別に走れないから走らなくていいわよというのではなくて、走りたいという人のゼッケンをもぎ取って阻止しようという、そういう動きがすごくあったのです。いずれにしても、その彼女が初めて四二・一九五kmを完走して、これまでの考え方を変えていきます。そういうところから徐々に、「何だ女性も走れるのじゃないか」ということで門戸が開かれていくわけです。これはまあ一九六〇年代の話だから、今から三十年、四十年前の話だというふうに笑うけれども、実は今現代でも全く女性がスポーツが出来ないような場所というのがあります。それはアラブの湾岸諸国です。

今歴史の話を簡単にしましたけれども、アラブの湾岸諸国ではどうなっているかというと、この間のシドニーオリンピックの時に聖火の点灯をした人は誰か、みんな知っていますか。アボリジニのキャシー・フリーマンという選手でしたけれども、聖火を点火する時の彼女の服装はどんな服装でしたか。ボディースーツみたいな感じでしたよね。「ああ」と思い出した人もいると思うけれども、あの体の線を丸見えにしているような開会式でのキャシー・フリーマンの点火の様子は、アラブの湾岸諸国には中継されませんでした。それからアラブの湾岸諸国の場合では、イランの場合には、女性の種目というのも一切中継されていません。だから、女の人がスポーツをするなどということはイランの人は知らないのではないでしょうか。でも、現実にはやりたいという人もいるのです。

イスラム革命の後、女子のスポーツというのはイランではほとんど行われなくなってきたのですけれども、実は今回バーレーンで、バーレーンというのもかなり制約のきつい国だったのですが、今回二人の女の子がオリンピックに出場してきました。十六歳と十二歳。若い年齢だから、子供だから許されるだろうというようなことで出場してきたということもあるようなのですけれども、かの国では非常におもしろいのは、例えばアーチェリーは絶対に女性がやってはいけない、何ででしょう。アーチェリーの弓を引くときに胸の線が露わになる。それから乗馬も絶対してはいけない。落馬して万が一、ずっと頭に被っているストールがありますね、あれが外れると人に顔を見られるから、それも決してよろしくない。

いずれにしても、そういう考え方をする国というのはまだまだあるわけです。それからもっとおもしろいのは、私は今年の七月はドイツに行って、ケニアのロルーペ選手というマラソン選手なのですけれども、この人の取材をしてきたのです。ロルーペさんというのは世界最高記録の保持者であり、かつ一〇〇〇〇mでも強い選手で

す。実際のオリンピックでは、前日に食べたものが当たってしまって力は発揮出来なかったようなのですが、そのロルーペ選手に話を聞きにいったら、「私はとにかくケニアにいる時には練習をさせてもらえなかった」と言うのです。

ケニアでは女の子は十六、七歳で嫁に行きますけれど、この時に牛五、六頭と引き替えに嫁に行くわけです。女の子一人は牛五、六頭だよ。五、六頭にもならなくて一頭かもしれない。女の子は早く嫁に行ってくれれば、牛五、六頭が家族のために入るのです。だから、ケニアでは女の子は早く嫁に行って、牛と引き替えに家族に財産を作るために、とにかく早く嫁に行って働く、そして子供を産む、これだけのためなのだよね。そういうところから彼女は抜け出したいと思ったのです。だけれども全然環境がないでしょ。まあたまたま助けてくれる人がいたので、彼女の才能に賭けた人がいると言った方がいいのかもしれない、それでドイツに来たわけです。ドイツのデトモルトという非常に寂しい村なのだけれども、そこに来てワーグナーさんというコーチに出会って、この人は中学校の数学の先生なのだけれども、自分が走るのが大好きで、ジョギングでヨーロッパ中を回っていたという人なのですが、そういう人に出会ってトレーニングをしていくわけです。そうやって彼女が成功し始めて、ニューヨークマラソンも何連勝かして、「ああ、なんだ、ケニアで女の子も走ってこんなに賞金が稼げるんだ」と分かるようになってから、やはりケニアから同じようにドイツのデトモルトにやって来る人もいるし、それからちょうどその後日本にワンジロさんというケニアからの中学生、高校生がやってきて、この間オリンピックでは四位になったのです。それからアメリカに留学に行く人もいた。アメリカではトラックに出たりとか、ロードレースが沢山あるので、そこで賞金を稼いで家族に仕送りを始める人達がいる。自分でお金を稼ぐという方法を選手達が見つけ出したわけです。でも、ケニアにいる限りでは絶対にそれは打破出来なかったのです。何かしようと思った時に、思い切って片道切符を持って、飛行機に乗ってフランクフルトに降り立った時から彼女の道は開けてきたわけです。それまでの誹謗中傷は大変だったそうです。もう思い出したくもないぐらい「女はおまえ、家にいればいいんだ、何でこんなことをしているんだ」と散々言われて、そのインタビューしている間に彼女は泣き出してしまうのですから。そのぐらい誹謗中傷を受けているわけです。だから、彼女にとってみれば、練習が出来て、そしてこうやって競技会に出られるということがどれだけの喜びなのか。そういうものを抱えている人は、その喜びはとても大きいですよね。

私は何でこんな話をしたのかというと、スポーツをすることは本当はみんながとっても苦労して得てきた権利なのですよ。で、世界の中にも、なかなかやりたくてもやれない人達がいるのだよということをちょっと知って欲しいなと思うのです。

あと、元々近代スポーツというのは女の子にはあまり向かない部分もあるのは確かなのです。というのは、闘争心を煽るとか、青年独自のいわゆる強さとか独立心とか、それから協調性などというのもあるのだけれども、基本的に男性の社会モデル、男性の青年像を理想として作られた競技がいわゆる近代競技、オリンピックのスポーツと言われているものだから、どうもああいうのには馴染まなくてという女の子がいても、それは不思議はないわけです。

で、そういう選手達は何をやるかというと、新体操みたいな新し

い競技を作ったりとか、あとシンクロをやったりとか。

で、今度シンクロをやっているとおもしろくて、アメリカでシンクロナイズド・スイミングでNo.2の選手というのは男の子なのです。上手よ。チームで一番体は柔らかいし、一番脚の線も綺麗だし、臑毛もちゃんと剃って脚を出すから、このシンクロの技は見事ですよ。女の子だからなどという、女の子だから、じゃ何が出来るのだというぐらい彼の演技は素晴らしい。ある意味で言えば、彼が目指しているものはフィギュアスケートのペアのような、男性と女性が一緒になって、男性の持っている力強さで女性の美しさを際立たせるような、ああいうミックスペアのようなものが出来ないかなというのが、彼が探している方向だそうです。その内、フィナー（FINA）国際水連の規約が変わって、そういう競技が生まれてくる可能性もあります。要するに自分達がやりたいなと思ったものを、本当にそこに向かってやる人達がその楽しさを自分のものにしているという感じなのかな。

あと、競技スポーツというのもあまり勝った負けたばかり言うから嫌だなという人もいるかもしれません。大体みんなスポーツというと、競技スポーツだけをイメージしていませんか。競技スポーツだけがスポーツだと思っていませんか。ところが、欧米の特にヨーロッパにはスポーツ法というものがあるのだけれども、例えばドイツ、「ドイツ国民はスポーツをする権利がある」と書いてあるわけです。スポーツをする権利があるのですよ。じゃこの「スポーツ」とは何なのかというと、競技スポーツはもとより、あとアウトドアスポーツというのもある、あとリラクゼーションスポーツというのがある、あと表現スポーツというのもある。女の子は結構この表現スポーツが好きかもしれない。シンクロナイズド・スイミングとかダンスとか、こういうのもみんなスポーツなのです。要するに、心と体を優しくしてくれたり、鍛えてくれたりする身体表現ですよね。身体表現をみんなスポーツと言うのです。

ところで、スポーツの語源は何か知っていますか。これはいろいろあるのですけれども、私が好きなスポーツの語源をご紹介します。元々ラテン語では、スポーツのことをディスポルトと言ったそうです。ディスポルトからスポーツというのは来たと言われているのだけれども、ディスポルトというのは何かというと、港を離れる、いつもいるところから離れて自分をリラックスさせる、解放する、これがスポーツの語源だと言われているのですよ。

そう考えると、さっき言ったスポーツにはいろいろな種類があるのですよという話が少し分かっていただけたのではないかなという気がするのです。そうすると、みんなもきっと、「何だ、私もスポーツやっているわ」と言うかもしれない。

さて、ちょっとデータ的なことを話をしてみたいと思うのですけれど、シドニーのメダル、男性と女性のどっちが多かったでしょうか。思い起こすメダルって何、高橋尚子でしょ、それからヤワラちゃんでしょ、どう考えても女の子の方が何か印象に残っていますよね。シドニーでは女性が十三個メダルを取りました。そして一方男子はわずか五個でした。それからシドニーでは世界全体からの参加者というのも大体三八・三%が女子選手ということになりました。それからアトランタあたりで、日本選手団の場合には、男性選手と女子選手の数が半分半分になりました。それから女性がいない国は、世界で九カ国だけ、女性を送り出さない国は。これは湾岸諸国もそ

うだし、それからアフリカ諸国などでもそうなのです。

最近ではＩＯＣは新しい種目を採用する時に、その種目に男女の参加者がいることが最低条件になっているなど、男性と女性が同等にスポーツをしていくというのは当たり前の条件になりつつあります。

でも、じゃこれだけ女性がメダルを取ったから、日本の女性のスポーツ環境というのは恵まれているのでしょうか。どうだと思いますか。十三個もメダルを取ったということは、これは男より恵まれているということなのかな。実は、日本には独特のスポーツ感というのがあるのです。

私は実はスポーツを通して人間を見たいというのが最初の頃だったのです。スポーツというのは非常に凝縮された時間と空間でしょ、大会などというのは。それまで何年もやってきたことを一瞬にして発表するわけだから、そういう時の人間の心理というのは非常におもしろいわけです。心理だけでなくて、行動もおもしろいし、そういうところから人間って一体何なのだろうなというのを注目してきました。しかし、その後、スポーツというのは事によったら社会を映し出す鏡だなと思うようになったのです。スポーツを見ていると社会が見えてくるのですよ、いろいろなものが。そうやってスポーツを通して社会を見ていこうという、これは学問にするとスポーツ社会学とよく言われるものなのですけれども、そうやっていくと日本は非常に特殊なのです。

例えば長距離選手を見てみよう。高橋尚子ちゃんが金メダルを取った。じゃ日本は最高にマラソンが強いと言われている、こんな日本独特のシステムで素晴らしいものだと果たして言えるだろうか。実は、これだけ不況で、チームスポーツの野球とか、バレーボールとか、バスケットとか、どんどん企業のチームが廃部になっているよね。もう面倒見切れない、年間何億もスポーツには出せない、だからもう部を廃部しましょう。この間も日立のバレーボールがなくなったし、本当にみんなどんどんなくなっていってしまっている。そんな時代に大学や企業でどんどん作られ続けているスポーツがあるのです。それが長距離のクラブです。

だって考えてみたら、道路は日本中どこでもありますよね。ちょっと田舎へ行けば簡単に走れる場所はある。それで監督を一人雇えば、もうそれで即席の駅伝チームが出来上がる、簡単にマラソンチームが出来上がるということで、この長距離のチームだけは次々にまだ増殖を続けております。

本当に中学、高校から走るのが大好きでそのチームに入ってやろうと思っている子達がそういうところに行くわけだけれども、行ってみると合宿所に入れられて、毎日毎日同じメンバーでご飯を一緒に食べて、毎日毎日同じ監督の顔を見て。大体二十五、六歳の女の子がボーイフレンドもいないで、自分でご飯を作ることもなく、誰かが作ってくれたものを上げ膳据え膳で食べるということは、非常に不自然だと思わないですか。今セキスイの陸上部が何だかんだと言われておりますが、あの子達も自分たちが食べた茶碗も洗わないの。これが一人前の社会人ですか。それで金メダル取ってなんぼのものでしょうか。

日本の場合には、一生スポーツに関わっていくというベースがないものだから、とりあえず嫁に行くまでは目一杯やる。もう女工哀史と同じ、お給料も少ない、練習は朝から晩まで、会社の仕事もし

なきゃいけない、でも好きな走ることをやらせてくれるのだから我慢しなきゃいけないな、そういう中でやっている、本当は。外国の選手達を見るとどうだろうか。素敵なパートナーを見つけて、そのパートナーと伸び伸びやっていく。大体スポーツ選手と結婚したりするわけだけれども、旦那さんもスポーツをしながら奥さんもスポーツに励んで、まあ子供を作りながら、出産後もスポーツを続けていく。要するに、そういう女工哀史的な合宿所に閉じこめられてスポーツをしている限り、日本の女の子は出産してからスポーツを続けていくなどというのは無理だよね。そういうシステムが嫌で、有森裕子さんはアメリカに行ったわけですよ。

みんなが当たり前だと思っていることを、これで本当に当たり前なのだろうかと考えていって欲しいと思うのです。今自分が立っているシステムはこれで正しいのだろうか、自分が本当にしたいことは何なのだろうか、そのためにはどうしなければいけないのか、そういうことをちゃんと考えない人はただの男の奴隷だよ。やっぱり人間に生まれた以上、人間としてきちっと生きていきたいなというのはあるから、本当に好きな人のためにその人の人生をサポートしながら暖かい家庭を築いていく、本当に優しい子供を育てて、周りの人達に至福を与えていくような生活が出来るのだったら、それも私はとても素敵なことだと思うのでいいと思う。でも、そこにはちゃんとした考えがあるのだと思うのね。そういうことを考えなしに、目の前の快楽に流されないで欲しいなという気がしています。

女性のスポーツの話をしようと思ったのだけれども、話がとんでもない方に行ってしまいました。でも、みんなを見ていると、これからそういうことをきちっと意識していかないと、辛い時代が多分人生の中で来るだろうなという気がするのです。

そういうことで簡単ですが、ここで終わります。

質疑・応答

《ジェンダー、女性学の視点について》

○宮嶋　世界を、自分の位置を見ろと言っていたことで、私は言い換えたら物差しを指していると思うのですけれども、自分と世界の物差しを見ることは確かにすごく大切なことで、それが見れれば多分もっと世界というのは広がるのですけれども、実際こういう狭い、それこそ密閉された学校教育とかの中にいると見えないではないですか。だからこそ今目の前にあるものがすごく大切で、そういうことを言うとすごく広がってしまうのですが、だからこそ今若い人がいろいろ犯罪とかに走ってしまうのも、そういうのもあると思うのです。だからこそ教育が変わらなければいけないと叫ばれていて、女性学のこともそうなのですが、結構私達の時代って女性学がよくなっていても、小学校とかでは教わらないではないですか。女性学とかジェンダーとかも、言葉を知らない人が沢山いて、知るととても勉強になるし、ためになるけれども、分からない人はずっと分からないままいってしまうと思うのです。

結構私は自分の中の番組ではチャンスがある度に入れているのです。例えば橋本聖子さんの時もそうだったのですが、「聖子二十五歳」というのを作った時に、テーマは二十五歳になるとスポーツ選手というのは肩を叩かれるという年齢なのです、「そろそろいいんじゃない」って。それをどう乗り切るか、それは小さなスポーツという世界の中だったのですけれども、彼女の闘いというか、心の葛

藤とかいろいろなものをやってみました。

《勉強する目的について》

○宮嶋　何のために勉強しているのかということが明確にみんなの中に出来ていないのではないの。そこが一番問題のような気がするのです。字を暗記することが大切ではないのです。常識として知らなきゃいけないことはある。だけれども、それは後でいろいろな自分自身とか社会とかを考えていく時に大切になるものですよという、その基本のベースを作っているのだという認識がものすごく少ない。それは学校教育が行うことだけではなくて、お家の中でもそうだと思うの。親になって「勉強しなさい、勉強しなさい」と言うだけではなくて、みんなも親になるのだからちょっと心しておいて欲しいのだけれども、子供にただ「勉強しなさい」と言ったって頭に来るだけでしょ。何で「勉強しなさい」と言うかといったら、それはいい学校に入ってもらいたいから言うわけではないの。そんなのはくだらないことなの。みんなそうでしょ、そういうふうに言うでしょ。「いい学校に入ったら、日本はレールが敷かれているから、それに乗り遅れたらえらいことになるわよ」。そうじゃないのです。乗り遅れようが何だっていい、何かあった時に一人できっちり人間として二本の足で地面に立って生きていくためのベースとして、今勉強していることが必要なのだということなのです。ちょっと方向がみんなおかしいのだけれども、そういう勉強するためのモチベーションとか方向付けというのをもっときっちりやっていく必要があるのだろうなという気がする。そういう方向付けとかというものをみんな子供の頃から受けたことありますか。何のために勉強しているのかということ、何のために歴史を勉強するのかとか、何のために国語を勉強するのかとか言われたことありますか。それを考えようね。そして、自分が子供を産んだ時に、それを一緒に子供と考えてお話が出来るようなお母さんになって欲しいなと思います。

《ニュースステーションの方向性について》

○宮嶋　ニュースステーションの方向性そのものは変わっていないと思うのです。ただし、それを表現する手法が変わっていると思います。例えばＮＨＫのニュース10が始まって、多分大ピンチになるのではないかといったけれども、全然ニュース10とは大差が開いているわけです。これは何が違うかというと、ＮＨＫのニュースを見ていると本当に笑ってしまうくらい、お上の発表をそのまま出しているだけなのね。ニュース10とニュースステーションを見比べてみて、これは膨大なリポートが書けるくらい。報道とは一体何であるかという、非常に原始的な部分が分かりますよ。ＮＨＫはお上が発表した記者発表、官庁発表、全てそういうものだけを羅列しているのです。で、ニュースステーションは何でおもしろいかというと、その発表を元に、こんな発表がなされたけどこれは本当かな、こんなことを言っているけどこれは何なのかな、そこから考えてみる。だから、この二つの番組は同じ時間帯に放送しているけれども、全く違うわけ。これは本当におもしろいと思います。チャンスがあったら皆さんもやってみてください。

（平成十二年十二月九日　現代文化学会講演より　文責　飯野　守）